

厚生労働科学研究費補助金
難治性疾患政策研究事業
分担研究報告書

急性帯状潜在性網膜外層症に関する調査研究

研究分担者 九州大学・大学院医学研究院・教授 園田 康平
三重大学・大学院医学系研究科・教授 近藤 峰生
東京女子医科大学・医学部・教授 飯田 知弘
研究協力者 東京慈恵会医科大学眼科学教室・准教授 林 孝彰

研究要旨:急性帯状潜在性網膜外層症(acute zonal occult outer retinopathy, AZOOR)は眼底には目立った所見を示さず、急激に視力低下や視野欠損を生じる網膜疾患である。現時点では原因も不明であるが、AZOORは決して稀な疾患ではなく、一般の眼科医が疾患を正しく理解し診断するためのガイドラインが必要であった。現在我々はこれまでの文献や専門家の意見を参考にして、厚生労働省網膜脈絡膜・視神経萎縮症調査研究班を中心として、診断ガイドラインを作成した。今後は患者数の把握と適切な対処法を追求していくことが大切である。

A. 研究目的

AZOORは、1992年にGassが提唱した比較的新しい疾患概念である。若年女性に好発し、光視症を伴って急激な視野欠損で発症し、網膜外層を傷害することがわかっている。去年までに診断基準・重症度分類ができていた。診療ガイドラインは日本眼科学会雑誌に掲載済みで、令和2年度に患者数調査を行った。令和3年度の主な目標は調査結果の解析と、今後の方向性を検討することである。

B. 研究方法

令和2年度に行った調査結果を元に、患者数だけでなく臨床的な特徴も併せて解析を行った。

C. 研究結果

調査によって、AZOORは片眼性が多く、視力が0.3以下になる割合も6%であることが判明した。視力障害と言う点では軽度であり、国策として難病申請のためのレジストリ構築を進めることについては慎重な意見があった。本症は自己免疫疾患の合併が

多いという報告もあり、今後は癌関連網膜症や悪性黒色腫関連網膜症など自己免疫網膜症として枠組みを組み替えて進めていくことを考えている。

D. 考察

診療ガイドライン作成により、疫学調査が可能となり、治療法開発に向けた臨床研究や予後予測に有用な臨床情報の収集が可能になった。この成果を学会誌に今後発表予定である。

E. 結論

現在日本に 1000 人強の患者がいる。片眼性が多く、視力が 0.3 以下になる割合は 6%であった。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし